

「 湘南オープンウオータースイミング 2016 」

2016 年 8 月 28 日 2.5 キロの部出場（葉山湾）

水の惑星を彷徨



前回の記録を 21 分短縮してゴール！——1 時間 8 分 3 8 秒。
圧倒的な力強さを誇る私が、ここにいる。

今年の夏は暑い日が続く。5 月に入ってから 8 月 28 日まで晴れ、また晴れ。
ひたすら記録的に暑い日が続いた。年々暑くなってくるようだ。

「貴方はこれでも我慢できますか？」問いかけるように暑い夏の日差しが私の頭上に輝いていた。

たぶん、多くの方々の頭上にも許しがたい未来を思わせる熱き輝きを見せたに違いない。堪え難きに耐える修行を楽しんで頂けたらどうか。

4 月の半ばから毎朝 2 キロのスイミングを楽しむ為に太平洋に向かう。といっても相模湾のごく狭いエリアである。今年の夏は例年と違い、この 4 ヶ月程ほとんど波は静か。沖合を泳いでいる人はいつも私一人。でっかいプールのような海に浮かんでいると南海の孤島にいるかのようだった。

これだけ毎日海で泳いでいると身体は魚のようになってくる。身体全体が鱗の様な薄い模様におおわれ、顔は魚のように尖り始める。声もヒーヒーしわがれ海鳥のようにトーンの高い声が出てくる。やがて人々と満足に話せなくなる。

先日はいつものように泳いでいると鳥に足をチョンチョンとつままれ、イテツと振り返れば、大勢の鳥達に囲まれていた。まるでヒッチコックの映画のようだと思いながらそのまま泳いでいると、追いかけるように私の足をついばむ

ではないか。

温厚で神様のような私にも怒りが込み上げる。泳ぎを止め、近くをうろつく鳥の首根っこを捕まえ夕食の鳥飯にと手を伸ばすも、微妙な間合いを計って避けられ、虚しく遊ばれる。

遊んでもらっているのか、遊んであげているのか分からないまま、この成り行きを諦める。自然界の営みは難しい。

静かな海を泳ぎ始めるも、時の過ぎ行く間に次第に風は強まり、波がたち始め白波に身体が持って行かれそうな時がある。でも安心して下さい。馴れれば静かな海と変わらず泳げるものである。慣れというものは恐ろしい。

魚達が荒くなった海で溺れたという話を私は聞いた事がない。

クラゲに刺されても安心して下さい。痛みはあれども、蚊に刺されたぐらいにしか感じなくなってくる。クラゲにとって私の存在は、敵対するものではなく、同じ仲間という意識が芽生えてきたのだろう。やがて刺される事もなくなった。と、言ってはみたが海は怖い。

考えてみるとプールには7～8年通っていない。

プールは狭いので人間が小さくなるようで怖い。大海を知らずして海を語る事なかれ。プールでは25メートルも進むと壁が現れる。海では1キロ直進をすると、さすがにそろそろ帰ろうか、もう少し進もうかと考え始める。

プールで眠りながら泳ぐ事はできない。そこに壁があるから。

海では自分の位置関係を一応把握していないと我が国の領海を超えてしまう恐れがある。

晴れて静かな海は視界良好で快適であるが、どしゃ降りの雨に変わってくるなど視界不良の時もある。それなりの心の動揺を持って泳ぐ事になる。

プールで泳ぐ時、そもそも足がつくので溺れる事もないのになぜかプールの監視員の目がきびしい。プールとは不思議な場所である。

プールでは、とにかく細かい規則がいっぱいあって全部覚えられない。

プールでの監視はきびしい。悪い事は見逃さないぞと笛を首に掛け、赤いパンツで歩き廻る人が常にいる。大雑把な感じがなくて異常に親切でおせっかい。

以前プールで足が痺れて変な格好で泳いでいたら、大丈夫ですか！とお声がかかった。さらに「足がつった！」ともたもたしていると「すぐに出なさい！」と怒られた。

大丈夫かどうか見れば分かるだろうに、プールの監視員は親切に磨きがかかり過ぎである。

溺れそうな人を好んで入場させているのか？プールには「溺れない人お断り！」そんな表示があっても良いほどおせっかいである。

プールでの楽しみ方では、時々喘いでみたり、死んだ真似をしたり、思いつき息を止め、うつぶせに浮いたまま我慢をしてみよう。いざ実験してみると結構目眩がしてくる。

時には、自分でもどうにもならないような生死の境を感じる壮絶な行為に酔いしれた一日をプールでは過ごすのもよし。なにが起きてもすぐ助けが入るから大丈夫だろう。心配ないと思う。しかし、おもしろいからといって、やりすぎるのは良くない。

海だからおせっかいな人がいないかと思うと、大間違い。ちょっと眠りながら、ふらふら泳ごうものなら、遠くから見ている人に溺れていると勘違いされる。毎年、通報され、それなりに騒がれる。

海で泳ぐ時はゆっくり泳いではいけない。それなりのピッチで泳ぐ。少々疲れが出てきてもフラフラ泳いではいけない。ほとんどの人が携帯電話を持っていて、通報する人が多いから。人に迷惑をかけることになるから苦しくても大急ぎで泳ぐ必要がある。

私の人生はどうしてこんなにも気ぜわしいのだろう。と思いながら泳ぐのが海での正しい泳ぎ方である。

うしろから何かがやってくる。何かが私のすぐ後に近づいてくる。私を奮い立たせる何かが後から静かに近づいてくる。そして、不安から逃れるべく私は泳ぐ。なんとか見えない妖怪を引き離して難を逃れるのだ。そういう気持ちで今年のスイミング大会に向けた泳ぎの練習をしてきたつもりだ。

4ヶ月間、毎日泳いだ私に恐れるものは何もなかった。

いよいよ当日の朝を迎えた。天気は曇り。雨は降っていない。風はつよい。昨日まであれほど暑かったのに、今日は涼しい。いや寒い、半袖では寒いほどである。

安心して下さい。トライアスロン用ウエットスーツを購入したのです。今日という日は、ウエットスーツが力強い味方となってくれるに違いない。

会場に到着し、ウエットスーツに着替える。さすがだ、寒くない！

ウエットスーツのない選手達は、透明ビニール袋の真ん中を破り、そこから顔をだし、簡易ウインドブレーカーを作って寒さに震えている。水温24度。陸上の温度22度、風が強いので体感温度が下がる。

私といえば、海に入ってひと泳ぎ、気持ちがいいのでもうひと泳ぎ。岸にあがってしばらくすると、ウエットスーツを着ているにもかかわらず寒くなってくる。再び海の中へじゃぼ～ん。海の中はあったかい。結局集合の合図が鳴るまで海の中。こりゃ今日はずいぶん泳ぐことになるな～

いよいよスタートです。オープンウォータースイムの競技ではスタートが最も緊張を強いられるのです。どの位置からスタートをしても300人程の選手が一斉に目標の黄色いブイに向かって泳ぐわけで、互いにぶつかり合い、前後は重なりあう。私は用心深いので大丈夫。無理をせず細心の注意をして人をかき分けていた。にもかかわらず、一瞬の隙を突いてゴーグルを蹴られゴーグルの片側がオデコにずれる。「やられた～」この混み合う状況で泳ぎながらゴーグルの内側に入った水をたたきだし、元どろろにする技は大変。立ち止まる事が

普通の状況じゃ～ない。オオカミに襲われているウサギカリスのようなものだから。こんな局面が 300m~400m は続く。百戦錬磨の私としても慌てる。

ゴールしてから数人の選手達に聞いてみると、一人は鼻を蹴られ鼻血が出て競技の続行を断念。一人は混雑を避けるように大きくコースを外れ、大回りしすぎて第一関門でタイムオーバーを宣言されボートに引き上げられる。水上スクーターに乗せられゴールに到着。

ゴールまでもう少しのところ規定時間オーバー。ゴールにたどり着く事なく回収される人々。ああ無情。いろんな人がいるものだ。

さて、運良くゴーグルもしっかり調整でき体調も万全。泳ぎのピッチは上がってくる。気持ちも落ち着き、海の中をのぞいてみればこの逗子湾の透明度は素晴らしい。海底までしっかり見える。水深 10m ぐらいはあるだろうか。

昨日、ゴーグルのレンズを新しいものと取り替えたので視界良好。前回のレースでは目印のブイが見えない！と叫んでいたのが嘘のよう。これはいい。

しかし調子が良いからとはいえ、折り返しのブイを通過するまでこれ以上急ぐのは止めよう。

折り返してからが勝負だ。温存した体力を一気に吐き出し、獲物を追いかけるピューマのように猛然と獲物に食らいつくのだ。それにしても、折り返しまで 1250 メートルは長い。

折り返しポイントには、エイドステーションという場所がある。今回はそこでゆっくり飲み物の補給をして一休みをしよう。喘ぎながら泳いでくる選手を横目でみるのも楽しい。5分くらい休んでいても結果は何にもかわらないのだから。と、思いながら泳ぎ続ける。

ついにエイドステーションが来た。折り返しの黄色いブイの向こう 2 艇の船が飲料水を配っている。おお、やっと来たか！

近づく私に向かって「OS-1！」「水！」と叫んでいる。予想していなかったの思わず「水！」と叫び、飲みたくもない水を受け取ってしまった。飲むのだったら「OS-1」の方がいいよな～と後悔したがもう遅い。さらに呑み残した水は捨てたが紙コップの存在が困った。海に捨てるのはばかり、返しに戻る。後から迫ってくる選手の邪魔になりそうでゆっくり休んでいられない。エイドステーションの利用というのは慣れないと面倒なものだ。ゆっくり船につかまり休もうとしたのに残念。

折り返してからスイマーの姿は少なくなってきた。この辺りからスイマーの姿は右と左に姿はあるが彼らの進路が一直線ではない。

自分でゴールを確かめるもゴールは遠すぎる。はっきりしない。う～む～、うっかりするとコースから外れ無駄に泳ぐ事にもなりかねない。自分の目で確かめながら一直線に進みたい。しかし、遠すぎてよく分からない。

時々ヘッドアップして、ゴールと思われる辺りを一直線に進む。しかし、波のある海上から探すゴールは小さい。月夜の晩にリングをかじっているウサギを探しているようなものだ。分かりやすく言えば、大きなお皿にだんご餅がい

っぱいありました。その中の一個だけにたくさんの唐辛子が入れてあります。さ〜て、唐辛子がたくさん入ったお団子はどれでしょう。これで分かったでしょうか？私の苦悩が。お団子は好きですか？

左側のおじさんが妙に私に接近。私に対抗意識を持っているようで、煩わしい。右のお姉さんは私よりややピッチが早い。いかん！左側のおじさんが私の前に出ようとする。そうはさせまいと抜き返す。

左側のおじさんは今何を考えているのだろうか。ややムキになって追い抜きにかかっているように思えるが、私の思い過ごしなのだろうか。

「おじさん、いい歳をしてあきらめが悪いのだから。そろそろあきらめてくれよ、疲れるから」それも私の思い過ごしか？私は右の女性の方ににじり寄りスピードを上げる。「この女性なかなか早いな」そしておじさんが競り上がってくる。クモの糸を切るようにパチンと切り落としたいが、それもならず。ぶつぶつ一人言をつぶやきながら競り合いが続く。

三つ巴の合戦がつづいたまま、三人は奈落の底へまっしぐら。生きて再びゴールの前に浮かび上がれるか？

今年はリオのオリンピックの年である。今まさに、オープンウォーター10キロレースがテレビ中継されており偶然観戦した。50名ほどの選手が10キロ泳いでいるにも関わらずその差が広がらない。第一集団8名と、残りの第二集団に分かれたまま、最後の400mまでほとんど差がない。

さらにすごいのはゴールまで200m程に近づいた8人がほぼ横一線に並んだことだ。誰一人として脱落しないまま8人が全力でゴールに向かって進む。

猛然と泳ぎながらゴールまで残り100m。さらにヒートアップする。8レーンのプールさながら横一線のままのゴールに向かって突進。

ゴールは水面50センチほどのところにゴール板が張られており、通過する時この板をたたく事で到着タイムが記録されるようだ。

8人のスイマーがほぼ同時にゴールに突入。ゴール版をたたく。圧巻。100メートル自由形決勝を見るようだ。そして写真判定！

続いて行われた女子10キロレースのゴールもすごかった。いよいよゴールが近づいてきた。5人程が競り合ったままほぼ同時ゴールに突入。先頭の選手がわずかに早くゴール板を叩く。続いて2番目の選手と3番目の選手が上下にもつれ合うようにゴール板を叩く。写真判定。どっちだろう。

ゴール版にタッチする際、3番目の選手が2番の選手の上体にかぶさるように、もつれあうように乗っかかりゴール板を叩いていた。

3番の選手は2番の選手の手を故意に押さえたと判定され失格。私からみれば手を押さえられた方が悪い。としか思えない。失格はかわいそうだと思えてムズムズ-----ああ無情。

10キロ競技の選手達の泳ぎのタイムは私の2倍の速度で泳いでいるようだ。

私たち3人の競り合いが続く。この段階までくると一度乗ったスピードがそのまま続くので、惰性のように同じリズムで進む。戦いに挑む心が、泳ぐ力を持続させる。いつか相手が諦める。相手が諦めるまで攻める。それが勝負である。

時々ブイの確認をするが、目の前にあるブイがなかなかクリヤーできない。

近くに見えるものがこれほど遠く感じるとは。ゴールの向こうに見えるビルが大きく見えているが、いつまでもゴールに近づかない。まるで蜃気楼のようだ。

悟りの境地に入ってくる。淡々と泳ぐ。やがてゴールのざわめきを感じられ浜が近づいてきた。浅瀬に近づいているとはいえ、いつ立ち上がって走るか。迷う。明らかに砂浜が近づいた頃、前の女性が立ち上がる。まだ腰の上に水がある。結構深い。ひだり側のおじさんも立ち上がる。私も立ち上がる。

いよいよ砂浜決戦か！浅瀬に立ち、水しぶきを上げながら進む。砂浜に上がり一気に二人を蹴散らせ抜き去ろうとするも、ふら～とよろける。私も歳を取ったな～ここでよろけるとは。結局この二人のお尻を見ながらゴール！

いつになくこのさわやかな気分は何だ？疲れを全く感じさせない爽快感。

銀メダルを首に掛けてもらい、給水のボランティアお姉さんのところに向かう。オットここで目眩。お姉さんに倒れ込むも素早くかわされ、テントの棒をつかむ。

OS1 ボトルを受け取る。水(OS1 ボトル)がおいしい。競合した二人には敗れたがすばらしい戦いだった。敵ながらあつぱれと言っておこう。

砂浜を歩き、後続のスイマーを眺めていると、ご同輩とおぼしき人物が、私を待っていたかのように声がかかる。

この大会に知り合いはいないと思うし、記憶にもない顔だ。「いや～探していました。前にも大会に参加されていましたよね！」「-----ええ～参加しましたけどどなた？」「土田です！」土田さんは毎年参加されており現在75歳。まだまだ行けそう。すばらしい肉体美。50代～60代でも通用する締まった肉体がまぶしい。

土田さんに声をかけられ、話を聞くうち「ああ、そんな話し、しましたね～」遠い記憶が次第に呼び起こされ、断片的だったパズル片が合わさってきた。再会のよろこびが膨れ上がる。

ともに戦争体験をした仲間と言った感じ。生死を賭けた熱い戦い。そんな絆が強く印象として残る。戦争が終わってから生まれた私ではあるが、そんな感じだろう。たぶん。

先日家から少し離れた道筋でやや遠くから角を曲がって来た小学生4～5年生とおぼしき女の子がこちらに近づいて来た。遠目にもおしゃれで、いったいこのおしゃれ感覚は本人のものなのか、はたまたお母さんのコーディネートによるものかと、感づかれないように意識を消して、それとなく見て考えた。

そして、すれ違いざま、少女は顔を上げ「こんにちは！」と私に声をかけた。それは、あまりに突然。予期しない展開であり、私は動揺しながらも「今日は」と答える。全く見知らぬ少女に声をかけられ、そのまま数歩進み我にかえり、振り返った。すでに、そこに少女の姿はなかった。

別の日、我が家から700mほど離れた住宅街の道路で、ピストルを持った少年が私に近づいてきた。「白い屋根の家に住んでいる人ですよ？」突然の問いかけに、なんだろうといぶかしげに少年を見つめ「君は誰？」と聞いてみる。

少年は「おじさんの近くに住んでいます。時々見かけます」丁寧な会話だが、最近の少年でおじさんに突然話しかける事が出来る子を私は知らない。少年はおろか、そんな一般市民に出会った事がない。それもピストルを持ちながらである。

ふと、道路の脇に目をやれば、もう一人の少年もピストルを持っている。いやこちらの少年は機関銃も背負っている。重装備だ。どちらも小学生だろう。これで何となく、いま私の置かれている状況が見えてきた。ここはイラクやシリアではないのだから。茅ヶ崎の住宅街なのだ。前からこの辺りで銃の打ち合いをしている姿を目撃している。

家から700m程離れた場所で見知らぬ少女や、少年に声をかけられる私って、「私はだれ？」「私は何者？」

今年の夏は巡り会いの季節なのかもしれない。鳥達との不思議な交流もあった。この世界は、次の世界ともつながりが在るのだろうか？私にはそうとしか思えない。そう思うとなにか嬉しい気持ちが身体の中からふわ～と湧いてくる。

この惑星はすばらしい。次も又ここで生まれ、逢いたい人がいっぱいいるこの惑星で君を探そう。

三枝樹